

# 運動部活動における部員の動機づけを高める要因

成田 泉<sup>1)</sup>・北村 有香<sup>2)</sup>・水内 豊和

## The Factors that Enhances High School Sports Club Students' Motivation

Izumi NARITA, Yuka KITAMURA & Toyokazu MIZUUCHI

### 摘要

本研究では、部活動に対する部員の動機づけを高める要因にはどのようなものがあるのかを明らかにするために、A高校バドミントン部という高等学校の運動部活動を対象として、約2か月間（総観察回数22回、総観察時間約108時間）、参与観察を行い、修正版グラウンデッドセオリー法による分析を行った。その結果、部活動に対する部員の動機づけを高めている要因として、〈保護者〉や〈OB〉、〈外部の指導者〉といった「人的環境」と、〈思いが込められたもの〉や〈成長や結果が認められる機会〉、〈練習場所〉といった「物的環境」などがあることが明らかとなった。このように、部員の動機づけを高めている要因が多数あることは、直接的または間接的に部員の動機づけを高める上で影響を与えており、そのことから部員は様々な場面で動機づけを高めて練習に取り組めることができるということが本研究から示唆された。

キーワード：動機づけ、部活動、参与観察、M-GTA

keywords：Motivation, Sports club, Participant observation, Modified Grounded Theory Approach (M-GTA)

### 1. 問題と目的

高等学校学習指導要領総則（文部科学省，2008）によると、部活動を「生徒の自主的、自発的な参加により行われる」ものと定義している。また保健体育審議会答申（文部科学省，1997）によると「運動部活動は、学校教育活動の一環として行われており、スポーツに興味と関心を持つ同好の生徒によって自主的に組織され、より高い水準の技能や記録に挑戦する中で、スポーツの楽しさや喜びを味わい、豊かな学校生活を経験する活動」としている。さらに、高等学校学習指導要領保健体育（文部科学省，2008）の体育の領域においては「運動の合理的、計画的な実践を通して、知識を深めるとともに技能を高め、運動の楽しさや喜びを深く味わうことができるようにし、自己の状況に応じて体力の向上を図る能力を育て、公正、協力、責任、参画などに対する意欲を高め、健康・安全を確保して、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる」ことを目標としている。これらのことから体

育授業と同様に運動部活動においても、生涯にわたって運動を継続する基盤が現役時代に形成されていることが望ましいと考えられる。

このように部活動は教育的にも価値があり、社会的な意義がある一方でいくつかの問題もあげられている。中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議による「運動部活動の在り方に関する調査研究報告」（文部科学省，1997）では部活動の現状をめぐる課題が指摘されている。それによると（1）活動量の問題、（2）顧問の実技指導力の問題、（3）部員数や顧問数の減少、（4）顧問の高齢化の問題が指摘されている。部活動の顧問教師にとっては、教科指導・学習指導・生活指導その他多くの校務に加えて、さらに部活動の指導がなされているのが現状であり、負担・過大・葛藤を抱えている場合もある。一方生徒にとっては、指導力不足の教員による怪我のリスクが高まる、十分に技術の指導を受けることができない、部活動の時間が長いことで疲労感が溜る、勉強にあてる時間が少なくなる等の問題がある。

このような様々な問題を抱えながらも生徒や顧問は日々部活動に取りくんでいるのは、部活動に対してメリットややりがい、満足感などを感じているか

1) 富山大学大学院人間発達科学研究科

2) あわら市立金津こども園

らではないかと考える。中須・阪田・杉山 (2016) は部活動における「動機づけ雰囲気」が特に部活動に対する満足度に影響していることを明らかにしている。「動機づけ雰囲気」とは重要な他者（コーチや部員）によってつくられる雰囲気と定義されている (西田・小懸, 2008)。このような状況要因が動機づけに有効な役割をもつことが報告されている (Ames & Archer, 1988)。

この「動機づけ」(motivation)とは、行動の理由を考える時に用いられる大概念であり、行動を一定の方向に向けて生起させ持続させる過程や機能全般をさす (赤井, 1999)。自己決定理論による動機づけでは自立性 (自己決定) の度合いにより、「非動機づけ」、「外発的動機づけ」、「内発的動機づけ」の大きく3つに分類されており、自立性が高のもっとも高いのは「内発的動機づけ」である (Deci & Ryan, 1985:2000)。また有機的統合理論では、「外発的動機づけ」を「外的調整」、「取り入的調整」、「同一化的調整」、「統合的調整」という4つの自己調整に分類している。さらに、基本的心理欲求理論では、価値の内在化 (動機づけの自己決定への移行) に、自律的になりたい (自立性への欲求)、有能になりたい (有能さへの欲求)、人と関わりをもちたい (関係性への欲求) という3つの心理的欲求の充足が重要としている (Ryan & Deci, 2002)。

こうした動機づけの理論をふまえて、運動部活動における動機づけと指導者やチームメイトとの関わりについての研究がいくつかみられる。藤田・松永 (2009) は運動部活動での社会的要因としてコーチ及びチームメイトのどのような行動がどの心理的欲求に影響するのかを明らかにしている。また松井 (2014) は、高校運動部活動における生徒の内発的動機づけに対する指導者のフィードバック行動の影響は生徒とチームメイトも指導者の親和的信頼関係によって異なることを明らかにした。伊藤・河井・池本・杉山 (2016) は運動部に所属する中学生に質問紙調査を行い、運動部活動に所属する部員の動機づけを高めるには、指導者がどのような指導を行うにせよ、部員の心理欲求を充足させることが重要だとしている。しかしその一方で課題として、動機づけの変化を検討するアプローチが必要であると述べている。

このように、これまでの先行研究では部活動における動機づけの心理的なメカニズムを明らかにしよ

うとする試みは数多く行われてきたが、指導者と部員、あるいは部員だけに対象を限定していることや、ある時点での質問紙調査やインタビュー調査でしか行われておらず、その他の要因や、個人の違い、認知や行動の変容といった不可逆的な時間推移の中での実情に即した動機づけの様相は明らかにされていない。

そこで本研究では、A高校バドミントン部という高等学校の運動部活動を対象として、約2ヶ月間、筆者がそこに身を置き、参与観察を行い、動機づけが高い環境では具体的にどのような生徒や先生を取り巻く現象があるのかを明らかにし、また、どのような現象が彼らの動機づけを高めているのかについて、自然な文脈の中のリアルな営みから仮説を生成することを目的とする。

## Ⅱ. 方法

### 1. 観察の対象

本研究が選定したフィールドは、A高校のバドミントン部である。A高校は生徒約1,000名、教職員約125名の工業高等学校である。男女比は9:1と女子より男子のほうが圧倒的に多いことが特徴としてあげられる。卒業後は就職する生徒がほとんどである。A高校に設置されている部活動は文化系クラブと、運動系クラブあわせて約30団体があり、運動部のいくつかは県で1位という強豪校である。バドミントン部に所属している生徒は1年生12名、2年生8名、3年生10名の計30名である。そのうち女子は2年生の2名だけと非常に少ない。顧問教諭は、X教諭 (顧問) とZ教諭 (副顧問) の2名である。X教諭はバドミントン経験者であり、学生のころから全国大会に出場しており、社会人になっても社会人チームでバドミントンが続いていた。Z教諭もバドミントン経験者であり、10年ほど別の高校でバドミントン部の顧問を経験していた。A高校バドミントン部の部員は初心者から県でベスト8に入る者まで個人のレベルはさまざまだが、一生懸命頑張りたいと思う生徒が入部する気風が続いており、それぞれ目標に向かって努力している。他校の先生や、T県内でバドミントンをしている生徒や卒業生にA高校バドミントン部について話を聞くと、「あそこのチームは雰囲気がいい」、「先生も生徒も一生懸命頑張っている部活だ」、「雰囲気の良さだったら

県でトップ3には入ると思う」などの意見があがった。A高校バドミントン部の保護者も「この部活は雰囲気がいいと思う」と話している。また、X教諭、Z教諭関わったバドミントン部の部員たちの多くが高校を卒業した後も何らかの形でバドミントンを続けている。このように、バドミントンに対する動機づけが高い部員が多く、先生や部員たちの動機づけを高める要因が質的にも量的にも多数あると考えられるA高校バドミントン部を、本研究における対象と位置付けた。また3年生は6月の総合体育大会で引退となることより、1年生から3年生が部活を共にできる4月から6月の期間を観察・分析の時期とした。

## 2. 観察の手続き

実際の部員や先生の姿から動機づけを高めている要因を明らかにしたいという目的に従い、より先生や部員の実際の具体的な姿を見ることができ、それら以外を取り巻く環境を知ることができることから、研究手法として、参与観察を用いた。

研究を進めるにあたり、対象者に対し、本研究の趣旨、個人情報保護、得られたデータの取り扱いについて書面と口頭にて説明を行い、部員一人ひとりの生徒とその保護者に対して同意を得た上で研究を進めた。主に練習や大会の様子を見に行ったり、一緒に練習を行ったりするという形で参与観察を行った。現場では、撮影や録音による記録は許可されなかったため、観察中にメモによる記録を行い、観察終了後に記録をまとめた。

観察する際、主に、先生と部員の関わり、部員同士の関わり、A高校バドミントン部に関わるその他の人やものなどに着目して観察を行った。

観察期間は20XX年4月28日から20XX年6月15日までであった。観察は週に2～4回の練習時間、さらには試合や遠征など学外での部活動のうち顧問教諭の承諾を得た時間の観察を行った。総観察回数は22回、総観察時間は約108時間であった。

## 3. データの分析

観察の際に得られた観察記録をもとに質的研究法の1つである修正版グラウンデッドセオリー法（以下M-GTAとする）を用いて分析を行った。今回の研究では「A高校バドミントン部において部員の動機づけを高める要因にはどのようなものがあり、

どのような関わりが部員の動機づけを高めているのか」というプロセスを解明することを目的としたため、M-GTAを分析手法として採択した。分析は筆者を含む6名で行った。

まず、分析するにあたり分析焦点者を「A高校バドミントン部の部員」とし、分析テーマを「A高校バドミントン部における部員の動機づけを高めている要因」とした。次に、観察によって得られた先生や部員の行動、それらに関わる環境を記録し、それらを読み、内容を把握した。分析テーマに関係のありそうな箇所に注目し、それを一つの具体例とし、具体例を解釈し概念名を生成した。次に複数の概念の関係からなるカテゴリーを生成した（木下, 2013）。分析の結果得られたカテゴリーとそれらを構成するエピソードについては、以下、大カテゴリーを《》、中カテゴリーを<>、小カテゴリーを【】、エピソードを「(○-△)」として表す。エピソードの「」内の(○-△)について、○は参与観察の何日目の記録かを示し、△はその日の何個目のエピソードかについて示す。

分析期間は20XX年8月3日から20XX年12月9日までで、総分析時間は約50時間であった。

## Ⅲ. 結果と考察

M-GTAによる分析の結果、2つの大カテゴリーと、10個の中カテゴリー、43個の小カテゴリー、270個のエピソードが抽出された。抽出されたカテゴリー一覧をTable 1に示す。また、分析の結果から作成した結果図をFigure 1に示す。

以下、計10個の中カテゴリーと、それを構成する小カテゴリー、エピソードから、具体的にどのような関わりが部員の動機づけを高めている要因であったかについて考察をする。

### 1. 《人的環境》について

部員の動機づけを高めている《人的環境》には、<先生>、<部員>、<保護者>、<外部の指導者>、<OB>、<他校の部員>の6つがあることが明らかとなった。

<先生>について先生が行っている部員の動機づけを高めていると考えられる行動は、主に【アドバイスをしている】、【認めている】、【注意をしている】、【一緒に練習する】、【応援している】、【伝

えている】、【何気ない関わりをしている】、【環境を設定している】の8つに分類された。例えば、【認めている】について、「ここからが今までの練習の成果出すところや。他の学校の生徒より一番体力あるのはお前や。(17-13)」というエピソードからわかるように、部員の良いところを認めることで、部員が自信をもってプレーをすることにつながったり、

部員の部活に対する動機づけを高めたりする要因のひとつとなっているのではないかと考えられる。

<部員>について 部員が行っている部員(チームメイト)の動機づけを高めていると考えられる行動は、【声を出している】、【声をかけている】、【アドバイスをしている】、【自分の思いを伝えている】、【目標を決めて取り組んでいる】、【変化をつけて

Table 1 抽出されたカテゴリー一覧

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	
人的環境	先生	アドバイスをしている	
		認めている	
		注意をしている	
		一緒に練習する	
		応援している	
部員		伝えている	
		何気ない関わりをしている	
		環境を設定している	
		声を出している	
		声をかけている	
		アドバイスをしている	
		自分の思いを伝えている	
		目標を決めて取り組んでいる	
		変化をつけて取り組んでいる	
		自主的に取り組んでいる	
応援している			
保護者		何気ない関わりをしている	
		環境をつくっている	
OB		試合の応援にくる保護者がいる	
		山場の試合の前に先生と部員全員に差し入れを渡す保護者がいる	
外部の指導者		部活のことを気にかけている保護者がいる	
		OBは試合が終わった選手に声をかけている	
		外部の指導者が選手にアドバイスをしている	
		外部の指導者は生徒に対して技術面だけでなく精神面に対しての言葉かけをしている	
		外部の指導者はチームに足りないことをキャプテンに伝えている	
他校の部員		外部の指導者は部員に生活面の態度と技術はつながっていると伝えている	
		外部の指導者と先生は一貫した指導をしている	
		他校の部員に応援される部員がいる	
		他校の部員と話をする部員がいる	
物的環境	練習場所	他校の部員の試合を見に行く部員がいる	
		男子部員と女子部員は同じ練習場所で練習をしている	
	思いが込められたもの		ユニフォーム
			部旗
			試合の記録を残しているノート
			新しいもの
			チームメイトのもの
			応援コール
	部員の成長を感じる機会		部内戦
			練習試合
遠征			
大会			
結果が認められる機会		表彰式	
		全校集会	

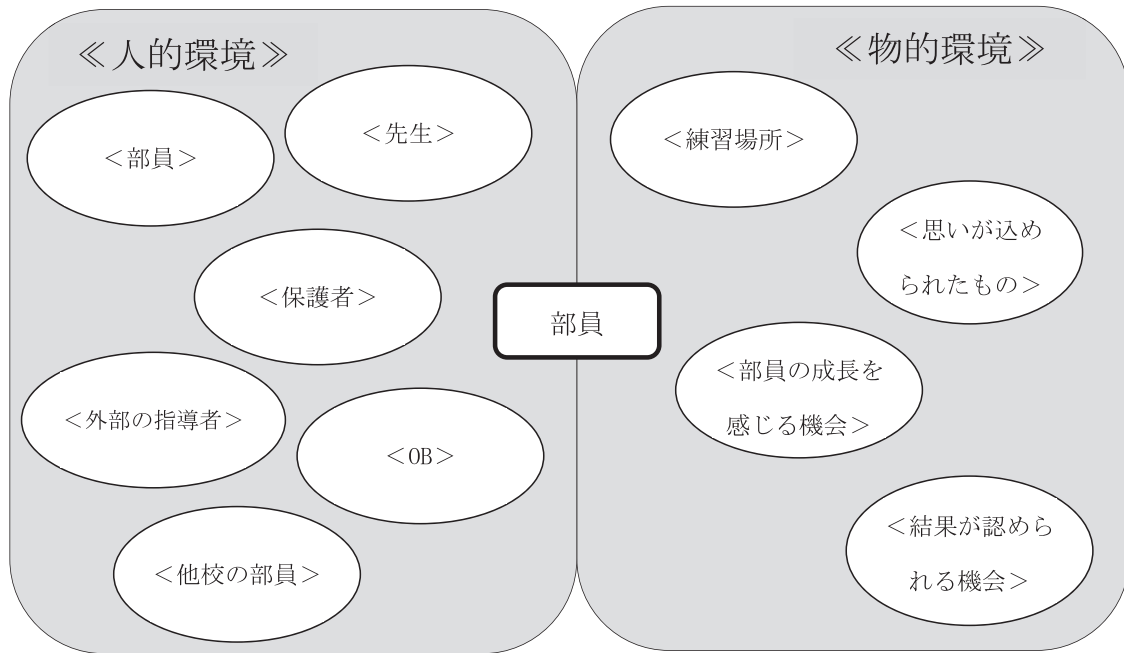


Figure 1 結果図

取り組んでいる】、【自主的に取り組んでいる】、【応援している】、【何気ない関わりをしている】、【環境をつくっている】の10個に分類された。例えば【アドバイスをしている】について、部員Hはある試合の後に、部員Cにアドバイスをもらいにいく場面があった。そのときCは「余裕あるときはシャトルより奥に足を出す。そこから打つ。(8-22)」とアドバイスをし、そのアドバイスを受けたHは、時間になるまで自主練習をしている姿があった。このように、部員同士でお互いのプレーや技術面に関してアドバイスをすることで、同じチームメイトとして技術を高め合うきっかけをつくっているのだと考えられる。

＜保護者＞について 観察から【試合の応援にくる保護者がある】ということが分かり、また、応援にきた保護者は水のうを用意したり、コート近くで部員の応援をしたりしていた。このように、保護者にとっても大会は子どもやその仲間たちの頑張る姿を見ることができる機会であり、楽しみにしているのだと考えられる。他の観察場面でも【山場の試合の前に先生と部員全員に差し入れを渡す保護者がいる】という一場面があった。このように保護者も部員や先生と一緒に戦っている存在だと考えられる。

また、普段の生活の中で【部活のことを気にかけられている保護者がある】という関わりがあった。普段の練習や大会会場への送り迎えをしていたり、昼食を用意していたり、練習着を洗濯していたりと、家

庭によって違いはあるかもしれないが様々な面で部員をサポートしていることが推察される。保護者の支えは部活をする上で非常に大きい存在であることが推察される。

＜OB＞について A高校バドミントン部を引退したOBがしばしば練習相手として練習に来ることがあった。そのようなOBの存在も部員の動機づけを高める要因のひとつになっていると考える。また、観察から、3年生にとって最後の大会という節目の大会に、A高校バドミントン部のOBが試合の応援に来ていることが明らかとなった。このことからOBは卒業してもA高校バドミントン部の仲間として力になっているのだと考えられる。

＜外部の指導者＞について A高校バドミントン部には顧問と副顧問以外にもしばしば外部の指導者が練習や大会を見に来てアドバイスをすることがある。A高校に来ていた外部指導者はシニアの全日本チャンピオンであり、以前顧問と同じチームで過ごしてきた。練習の中で【外部の指導者が選手にアドバイスをしている】という場面があり、観察から【外部の指導者は生徒に対して技術面だけでなく精神面に対しての言葉がけをしている】、【外部の指導者はチームに足りないことをキャプテンに伝えている】、【外部の指導者は部員に生活面の態度と技術はつながっていると伝えている】という姿がみられた。またこのような内容のアドバイスを先生も行っており、【外部の指導者と先生は一貫した指導をし

ている】ということが明らかになった。このように、指導方針が顧問と一貫していることで部員も混乱せず受け入れることができるのではないかと考える。

〈他校の部員〉について 観察では、大会で他校の部員と話をしたり、他校の部員に応援されたり、他校の部員と対戦したり、他校の部員の試合を見たりするという場面が多くみられた。他校の部員の存在を意識している部員にとって、彼らの存在は動機づけを高める要因の一つになっているのではないかと考えられる。

## 2. ≪物的環境≫について

A高校バドミントン部の部員の動機づけを高めている要因として〈練習場所〉、〈思いが込められたもの〉、〈部員の成長を感じる機会〉、〈結果が認められる機会〉の大きく4つの≪物的環境≫があると考えられる。

〈練習場所〉について A高校には体育館が2つあり、第二体育館を主にバスケットボール部と卓球部とローテーションで使用している。他にも地域の体育館を借りて練習することがある。また男子も女子も同じ環境で練習している。観察では、「(大会が近いけれど)男子と練習しているから大丈夫やろ。(17-5)」という女子部員の発言があり、この発言から女子部員にとって、男子部員と一緒に練習しているということが自信につながっているのだと考えられる。

〈思いが込められたもの〉について 部員の動機づけを高めているものとして、観察により、【ユニフォーム】、【部旗】、【試合の記録を残しているノート】、【新しいもの】、【チームメイトのもの】、【応援コール】の6つが明らかになった。【ユニフォーム】について、「やっぱり背面(名前と学校名)が入っているユニフォームは気合入ります。みんなですろっているやつは特に。(17-2)」と発言する部員の姿がみられ、このことから、部員の動機づけを高めている要因に【ユニフォーム】も影響を与えているということが考えられる。

〈部員の成長を感じる機会〉について 筆者が確認した部員の成長を感じる機会は【部内戦】、【練習試合】、【遠征】、【大会】の4つであった。【遠征】について、ある3年生の部員が引退する時に、「印象に残った遠征は、□□ですかね。そんないっぱい試合には出ていないけど、各県の強い相手とそ

れなりにやりあえて自分成長したんだなあって思えました。(22-6)」と話す場面がみられた。このように、練習の成果を発揮できる機会は、部員にとって自分の成長を感じることができる大切な機会となっていることが推察された。

〈結果が認められる機会〉について 結果が認められる機会として筆者が観察した中で確認されたものは【表彰式】、【全校集会】の2つであった。大会後の【表彰式】では、優勝した部員や準優勝だった部員が学校生徒全員の前で校長から賞状をもらう場面があった。このように〈結果が認められる機会〉は、部員がより嬉しさを感じたり、次の大会に向けて頑張ろうと思えたりするひとつのきっかけとなるのではないかと考える。

## IV. 総合考察

### 1. A高校バドミントン部において動機づけを高めている要因について

本研究では、A高校バドミントン部という高等学校の運動部活動を対象として、約2ヶ月間、筆者がそこに身を置き、参与観察を行い、動機づけが高い環境では具体的にどのような現象があるのかを明らかにし、どのような現象が彼らの動機づけを高めているのか仮説を生成することを目的として研究を行ってきた。その中で、A高校バドミントン部の部員の動機づけを高めている要因には部員を取り巻く様々な人的環境や物的環境が関わっていることが明らかとなった。質問紙調査やインタビュー調査を通したこれまでの先行研究では、藤田(2009)が先生や部員の存在が、部活動において部員の動機づけに影響していると明らかにしている。それらはこの研究でも同じ結果となった。一方で、そこでは明らかになっていなかった≪人的環境≫として、〈保護者〉や〈OB〉、〈外部の指導者〉、〈他校の生徒〉が存在することが明らかとなった。また、本研究では、それらの部員に対する具体的な関わりも明らかとなった。≪物的環境≫に関しては、今まで特に注目はされていなかったが、今回の研究で、〈思いが込められたもの〉や〈成長や結果が認められる機会〉、他にも〈練習場所〉という環境が部員の動機づけに影響を及ぼしていることが明らかとなった。

このように部員の動機づけを高めている要因はひとつではなく、いくつものが輻輳的に影響し合うこと

で様々な場面で動機づけを高めて練習に取り組むことができると考えられる。

## 2. 部員に対する顧問の関わり方の工夫について

本研究では、部員を取り巻く様々な環境が明らかになったが、それらの環境がただ存在すればよいというのではない。先生の部員への関わり方は相手や場面によって異なっており、そのような先生やチームメイト、また、それらに関わる人々の人柄や関わり方が部員の動機づけに影響を与えていると考えられる。

先生の部員に対する関わりには【認めている】こともあれば【注意をしている】こともあること、先生として【アドバイスをしている】ことや、【認めている】、【注意をしている】ということもあれば、部員と同じ目線に立って【一緒に練習する】、【応援している】、【何気ない関わりをしている】というように関わっていることなど、時と場合に応じて相反するものが存在した。

松井（2014）の先行研究によると、褒めるや励ますといった支持的なフィードバックが生徒の内発的動機づけに対して肯定的に作用するだけでなく、注意や叱責といった懲罰的なフィードバックも生徒と指導者の親和的信頼関係が築けている場合には効果的に作用することを明らかにしている。これは本研究でも動機づけが高いと考えられるA高校バドミントン部において、先生と部員との信頼関係が築かれていると考えられ、先生が行っている支持的なフィードバックも懲罰的なフィードバックもどちらの関わりも大切だと推察される。

これらのように部員の動機づけを高める先生の関わり方は多様で、場面や部員の姿に応じてメリハリのある関わりをすることが大切だと考えられる。またこのような関わりができる背景には、先生は部員の姿をよく見て、気にかけており、部員一人ひとりのことを理解して、場面や性格を考慮した上で一人ひとりに合わせた関わりを行っているからではないかと考える。

## 3. 部員の動機づけへの間接的な影響について

今回A高校バドミントン部に参与観察を行った中で、直接的ではないが間接的に部員に影響を与えていると考えられる事象が確認された。例えば、練習試合を通して外部の人と関わる際に、【先生は他校

の先生と部員の指導や練習方法について情報交換をしている】ということが分かり、そこで得た情報を実際に練習に取り入れることで部員にとって動機づけを高める上で間接的な影響を与えているのではないかと考えられる。また、【先生や部員は試合を見に来た練習相手の保護者に飲み物を渡している】という場面もみられ、練習相手や保護者にも丁寧に関わることで様々な面で応援してもらえたり、支えてもらえたりすることもあるのではないかと考えられる。

## 4. 部活動が部員に与える影響について

高等学校学習指導要領総則（文部科学省，2008）によると、部活動を「生徒の自主的、自発的な参加により行われる」ものと定義している。実際A高校バドミントン部においても先生や部員に対して自分の考えを伝えたり、部員が自分たちで環境を作ったりして自主的、自発的な姿が確認された。また、先行研究では、「動機づけ」のなかでももっとも自立性が高い「内発的動機づけ」を高めることで生涯にわたって運動を継続することが明らかとなっている（Deci & Ryan, 1985：2000）ように、自主的に行動することが「動機づけ」の中でも「内発的動機づけ」を高めることにつながるのではないかと考える。

これまでの観察の中からA高校バドミントン部では、バドミントンというスポーツを楽しむことはもちろん、他者と競い、アドバイスし合いながら技術を高め合ったり、技術だけでなく精神的に鍛えられたり、チームメイトと協力しながら部活動に取り組んでいるということが分かった。そしてそのような経験があることで部活を引退した後や社会に出た時の力になっているのではないかと考える。

## V. おわりに

本研究では、A高校バドミントン部の部員の動機づけを高めている要因にはどのようなものがあるのかを明らかにするために参与観察を行った。その結果、部員の動機づけを高めている要因には人的なものや物的なものなど様々あり、それらいくつものが輻輳的に影響し合っていることが明らかとなった。運動部活動の在り方に関する調査研究報告書（文部科学省，2013）によると、運動部活動は、スポーツの技能等の向上のみならず、生徒の生きる力の育成、

豊かな学校生活の実現に意義を有するものとなることが望まれる。そのような部活動が望まれる中、それを下支えするものは、部活動に対する部員一人ひとりの動機づけであり、その動機づけを高める要因こそ、望まれる部活動のあり方にとって重要なものである。もちろん、動機づけの形はその時の状況や雰囲気によって様々であるが、高い動機づけが生まれる環境があることそのものが、自然と望まれる部活動のあり方へ影響を与えているのではないかと考える。

## 謝辞

本研究の参加に快諾いただいたA高校の顧問教諭ならびに部員の皆様に感謝申し上げます。

## 附記

本研究は、第2筆者が特別研究に取り組む過程で収集した観察事例をもとに、筆者全員で再検討し論考を加えたものである。

## 引用文献

- 赤井誠生 (1999). 動機づけ. 中島義明他 (編) 心理学辞典. 有斐閣, 622-623.
- Ames, C. & Archer, J. (1988). Achievement goal in the classroom: Students' learning strategies and motivation processes. *Journal of Educational Psychology*, 80, 260-267.
- Deci, E. L. & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum Press.
- Deci, E. L. & Ryan, R. M. (2000). The 'what' and 'why' of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry*, 11, 227-268.
- 藤田 勉・松永郁男 (2009). 運動部活動参加者の心理的欲求に影響するコーチ及びチームメイトの行動. 鹿兒島大学教育学部教育実践研究紀要, 19, 71-80.
- 伊藤豊彦・河井克正・池本雄基・杉山佳生 (2016). 運動部活動における中学生の指導行動の認知, 心理欲求の充足, および動機づけとの関係. *健康科学*, 38, 21-31.
- 松井幸太 (2014). 高校運動部活動における生徒の内発的動機づけ—指導者のフィードバック行動お

よび生徒と指導者の関係性に対する生徒の認知からの検討. *スポーツ心理学研究*, 41, 51-63.

文部科学省 (1997). 運動部活動の在り方に関する調査研究報告

文部科学省 (1997). 生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について

文部科学省 (2008). 高等学校学習指導要領総則

文部科学省 (2008). 高等学校学習指導要領保健体育

文部科学省 (2013). 運動部活動の在り方に関する調査研究報告

中須賀 巧・阪田俊輔・杉山佳生 (2016). 運動継続のための大学運動部活動における動機づけ雰囲気, 自己開示, 満足度の関係. *スポーツパフォーマンス研究*, 8, 1-13.

西田 保・小懸真二 (2008). スポーツにおける達成目標理論の展望. *総合保健体育科学*, 31(1), 5-12.

Ryan, R. M. & Deci, E. L. (2002). An overview of self-determination theory. Deci, E. L. and Ryan, R. M. (Eds.) *Handbook of Self-determination Research*. University of Rochester Press: Rochester, NY.

(2017年10月19日受付)

(2017年12月20日受理)